

馥郁たる紅梅と白梅が旭に照り映える今日の佳き日、地方独立行政法人佐賀県医療センター好生館看護部長 宮地由美子様はじめ、多数のご来賓のご臨席を賜り、また、保護者の皆さまにもご参列いただき、ここに令和五年度第十八回佐賀女子短期大学付属佐賀女子高等学校衛生看護専攻科卒業証書授与式を無事に挙行できますことに、心より感謝申し上げます。

卒業生の皆さん、衛生看護専攻科での二力年はいかがでしたか。今でこそ「アフターコロナ」とは言うものの、「ウイズコロナ」の名のもとに、感染予防対策や行動規制、臨地実習の中断など、いわゆる「新しい日常」に振り回されることが度々ありました。けれども皆さんは、入学以来、このような逆境や幾多の試練にもめげず、看護師になるという志を貫いてきました。蛍雪の功なつて、晴れて卒業式を迎えられる七十一名の卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。(礼)晴れの門出を、心より祝福します。

皆さんは、念願の看護師として、新たな人生の一步を踏み出そうとしています。皆さん、「仕事上の達成感」や「人生における成功」を実感するにはどうすればいいと思いますか。結局のところ、「自分が夢中になれることを仕事にする」「与えられた仕事に夢中になれる」という結論に行きつくのではないかと思います。皆さんは、五年前、看護の仕事に就くという明確な志を抱いて佐賀女子高校に入学してきました。先日、国家試験も終わり、今、正に念願が叶おうとしています。よって、これからの人生を大きく左右するのは、看護師としての仕事に「夢中」になれるかどうかということです。現代社会は、「知識基盤社会」です。長寿社会の到来を見据えて、「学び直し・リスキリング」という言葉も日常的に使用されるようになってきました。医療現場は日進月歩、医療のDX化も急速に広がっています。これから先、あなたを仕事で夢中にさせるのは「知的好奇心」です。まずは仕事に興味を持って、楽しみながら学ぶことを続けていけば、いづれは周りの人から愛される頼もしい看護師になることができると思います。

さて、令和六年一月一日、石川県能登地方をマグニチュード7.9の巨大地震が襲いました。石川県の発表では、死者242人、住宅被害9万8510棟、1万3000人を超える人たちが今も避難生活を余儀なくされています。

被災地には、石川県能登地方出身の佐大附属病院医師、小網博之さんをはじめ、全国各地から災害現場などで救命措置をする災害派遣医療チームD-MATが派遣されています。その数は延べ1000隊を超え、先の東日本大震災の約800隊をはるかに上回っています。

D-MATの隊員たちは、余震の恐れがある中、被災地を支援したいとの熱意に突き動かされて派遣チームに参加しています。D-MATは、災害直後の救急医療から、今は高齢者施設や避難所での健康支援を行っています。被災地支援はまだ続いており、今後も息の長い支援が必要だということです。

また、地元の看護師についても、自らも被災した人が多いと聞いています。その大半は、自分のことはさておき、まずは地域の災害医療を最優先して献身的に力を尽くしたということです。

卒業生の皆さんは、この度の激甚災害に伴う被災地救護支援についてどう思いますか。このことは、「看護」の本質にも関わっています。

明治維新と位置づけ、日本における「看護職」の礎を築いた人物と言えば誰でしょうか。佐賀の七賢人の一人で、日本赤十字社の創設者「佐野常民」です。県内では、「佐野常民」の生誕二〇〇百年を記念する催しものが開催されています。

常民は、医者を目指した蘭学修行の時代に、「医業にたずさわる者は人のためのみ、己がためにあらず」という医の倫理に接し、感銘を受けます。そして明治政府の高官として文明開化を主導し、日本赤十字社の初代社長に就任して人道的な国際組織の発展にも力を尽くしました。磐梯山の噴火、濃尾大地震、

三陸地震津波などの自然災害に対して、赤十字社としては世界で初めて、自然災害による被災者のための「災害救護活動」を行いました。また、病院船を建造し、日露戦争では負傷者の搬送でも活躍しました。

こうして日本赤十字社が人道的な活動の場を拡げていく一方で、日本赤十字社を支援する団体として、女性皇族や政府関係者の妻らが集まり、「篤志看護婦人会」が結成されました。会長を務めた旧佐賀藩十代藩主・鍋島直天なおひろの妻、栄子ながこは、看護を通じて国のために尽くそうという忠国の志を、次のように詠んでいます。「たをやめも 心はたけき 武士むしのこと ともに尽くさむ わか国のため」。ここには、女性の立場から、救護活動を通じて、男性兵士と変わらない覚悟で国に奉仕しようとする強い決意が伺われます。また、常民は、当時男性の仕事であった看護業務に女性を参加させようと日本赤十字病院を設立し、女性看護婦養成事業にも本格的に取り組みました。

卒業生の皆さん、ここ佐賀には、二百年の歳月を超えて、佐野常民の「博愛の精神」が受け継がれています。「医業にたずさわる者は人のためのみ、己がためにあらず」「患者に対しては、貴賤貧富を顧みることなく、ただ患者を観て、深く患者を思ふべし。」「言行に誠意をもって対処し、患者に信任されることを求むべし。」「勇敢にして沈着なるべきこと」「忍耐にして寛裕なるべきこと」

衛生看護専攻科を卒業される皆さんは、郷土を代表する偉人、佐野常民の遺志を受け継ぐ後継者でもあります。皆さんには、今後ますます精進を重ね、人間性を培い、患者やその家族に寄り添った看護への道を邁進してくれることを期待します。

最後に、保護者の皆様には、本校の教育方針をご理解いただき、多大なるご支援とご協力を賜りましたこと、衷心より感謝申し上げます。(礼)また、その間、お子様の健やかな成長を願って注がれましたご慈愛に対し敬意を表します。

それでは、卒業生の皆さん、いよいよお別れです。皆さんが、「人生百年時代」のウェルビーイングの頼もしき担い手となることを期待するとともに、一人ひとりの前途に幸多かれと祈念し、式辞といたします。

令和六年三月一日

佐賀女子短期大学付属佐賀女子高等学校

校長

永田 彰浩